

令和4年度第2回紀南地域高等学校活性化推進協議会

配 付 資 料

- 令和4年度紀南地域高等学校活性化推進協議会委員名簿・・・・・・・・・・ P 1
- 【資料1】令和4年度第1回
紀南地域高等学校活性化推進協議会（6／7）の概要・・・・・・・・ P 2
- 【資料2】東紀州地域 中学校卒業者数の推移と予測（含社会増減）・・・・ P 4
- 【資料3】熊野市・南牟婁郡中学校卒業者数（予測）と
木本・紀南両高等学校への入学者数・・・・・・・・・・・・ P 5
- 【資料4】これまでの県立高校（全日制）の統合について・・・・・・・・ P 6
- 【資料5】令和7年度に想定される5学級規模の高等学校の学びについて・ P 12
- 【参考資料1】紀南地域の設置学科と学級数の推移・・・・・・・・・・・・ P 16
- 【参考資料2】学級規模による教育環境の比較・・・・・・・・・・・・ P 17

令和4年度 紀南地域高等学校活性化推進協議会 委員名簿

No		所属及び名前
1	学識経験者	三重大学教育学部 教授 平山 大輔
2	地域有識者	熊野商工会議所 青年部幹事 森本 健一
3		文恵丸水産 代表 長山 行文
4		紀宝町商工会 会長 田尾 友児
5	市町教育委員会	熊野市教育委員会 教育長 倉本 勝也
6		御浜町教育委員会 教育長 辻本 誠一
7		紀宝町教育委員会 教育長 西 章
8	小中学校PTA代表	紀南PTA連合会 会長 高垣 裕人
9		紀南PTA連合会 進路研究委員長 倉本 崇弘
10	高等学校PTA代表	県立木本高等学校PTA 会長 道前 涼太
11		県立紀南高等学校PTA 会長 中嶋 悦雄
12	同窓会・地域代表	県立木本高等学校同窓会 会長 森岡 忠雄
13		県立紀南高等学校学校運営協議会 会長 廣畑 勝也
14	小中学校長代表	熊野市立木本小学校 校長 川崎 奈保美
15		御浜町立尾呂志学園中学校 校長 高田 有治
16	小中学校教員代表	熊野市立金山小学校 教諭 久保 範顕
17		御浜町立御浜中学校 教諭 大崎 重久
18	県立高等学校長	県立木本高等学校 校長 松本 徳一
19		県立紀南高等学校 校長 堀越 英範
20	県立高等学校教員代表	県立木本高等学校 教諭 寺前 淑湖

令和4年度第1回紀南地域高等学校活性化推進協議会(6/7)の概要

- 1 日時 令和4年6月7日(火)19時00分から21時00分まで
- 2 場所 三重県熊野庁舎
- 3 概要

令和4年3月に策定された「県立高等学校活性化計画」では、15年先までの中学校卒業者の減少の状況をふまえると、これからの時代に求められる学びを提供していくには、現行の高等学校の配置を継続していくのは難しい状況にあるとし、高等学校の学びと配置のあり方について検討を進め、1学年3学級以下の高等学校については地域協議会で統合も含めた議論も行うこととしました。当協議会においても、この地域の15年先を見据えながら、令和7年度に5学級規模となるときの、地域の高等学校の学びと配置のあり方について協議しました。

主な意見は次のとおりです。

《15年先までの中学校卒業者の減少を見据えたときの地域の高等学校の学びと配置のあり方について》

- 紀南高校では特色ある授業「地域産業とみかん」に取り組んでいるが、現在のような生産現場までの学びに留まらず、生徒自らが商品開発に関わり、販売する機会を持つことで更なる自信の向上につながるのではないかと。紀南高校で実施されている社会人との対話集会の際に、地域の第一次産業の魅力も伝えていくべきだ。
- 産学連携による商品開発に取り組むなど、企業と共に何かを作り上げるようなことを進めるとよい。
- 高校への進学にあたっては、部活動に力を入れたい、大学進学を望みたいなど、それぞれ希望に応じた進路選択がなされている。人口減少問題だけで統合を考えるのではなく、子どもを第一に考え、学びたいと思える環境、どこに生まれても誰もが学べる環境を保障していくべきである。
- 小中学校でも同じような統廃合の課題がある。少人数の教育活動で、社会性・人間性が十分に育てているのかと疑問に思う場面もある。この地域の高校がどのような形になったとしても、子どもたちが自ら学びたいと思えるような学校を創るという視点で考えていくことが大切である。

《令和7年度に地域の高校への入学見込み人数が5学級規模となるときの、地域の高等学校の学びと配置のあり方について》

- 学級減をふまえ、紀南高校、木本高校の両校に設置されている現状の学科配置をどうするのかを先に議論するほうが良いのではないかと。また紀南高校が1学級規模となった際、校舎制も含め、本来あるべき高校教育の質が保障できるのかを検討する必要もある。

さらに昨年の協議では県から設置は難しいとの見解を得ているものの、防災の観点から安全な場所に新しい学校を設置して欲しいという地域の願いがあることも理解して欲しい。

- 今後の生徒の減少を見据えると両校の統合を進めるべきだ。その際には、両校の良いところを受け継いだ新しい学校としてスタートしてはどうか。同じ議論を毎年繰り返すのではなく、教育委員会から統合案を提示してもらったうえで、協議を進めたい。
- これまでの協議をふまえると、5学級規模の配置としては5-0か4-1か3-2しかないように思う。今年の12月までに方向性をまとめるためには、それぞれのパターンについてどのような学びが実現できるのか、メリット・デメリットも併せて、事務局で整理してもらい議論してはどうか。
- 前回の協議では、子どもたちには学校を選択できる環境があったほうが良いという意見もあった。地域の進学や就職へのニーズもふまえながら、それぞれの学級数でどのような学びが用意できるのかを最優先に、5学級の配置を考えるべきである。
- 新しい高校のあり方を考えるにあたっては、それぞれの学校に存在する良さをより高めるといった視点を大切にしながら協議を進めたい。
- 卒業生としては2校残したいという本音もあるが、経済的な面も考慮するべきであることも理解できる。子どもたちが自らの意思で高校を選択し、納得できる充実した3年間の学校生活を送れることが何より大切である。
- 自分自身で高校を選び、入学者選抜の競争をくぐりぬけて入学した生徒のモチベーションは高い。地域において高校を選択できるような配置のあり方を考えてあげたい。
- いずれかの高校に片寄った視点ではなく、この地域全体でどのような学びが必要なのかという視点が大切である。1校になれば高校入試の際に地域内での学校の選択肢はなくなるが、一方では一定の集団の中で切磋琢磨できる教育課程が生まれることも考えられる。
- この5年間で熊野市内の小中学校も3校が休校となった。地域の人にとって心の拠り所となる学校が無くなることはさみしいが、本当に子どもたちの視点に立つことで、どのような配置であっても、豊かな学びや自己有用感が持てるような環境を実現していくことができるよう議論していきたい。
- 高校生のアンケート結果の「学びたい、または興味・関心のある内容の学習ができる」という項目の回答が県平均に比べて低かったことをどうとらえていくのか考える必要がある。他県や他地域の状況を見ると、1学級規模での学びについては課題が多いようであるが、その原因やこの地域の高校にも当てはまるのかを、県からの資料や検証も参考にしながら協議していきたい。
- 今後の5学級の高校配置については、より議論が進むように子どもたちの学びの視点からどのようなケースが考えられるのか、具体的な資料やデータをもとにしながら、さらに議論を深めたい。

東紀州地域 中学校卒業生数の推移と予測（含社会増減）

資料 2

令和4年5月1日 教育政策課調べ

	H 31.3 卒業	R 2.3 卒業	R 3.3 卒業	R 4.3 卒業	R 5.3 現中3	R 6.3 現中2	R 7.3 現中1	R 8.3 現小6	R 9.3 現小5	R 10.3 現小4	R 11.3 現小3	R 12.3 現小2	R 13.3 現小1
尾鷲市	卒業生数	122	118	130	127	119	107	99	120	87	84	68	87
	前年度対比		-4	12	-3	-2	-12	-8	21	-33	-3	-16	19
	R4.3対比					-6	-20	-28	-7	-40	-43	-59	-40
北牟婁郡	卒業生数	115	110	112	121	93	75	94	79	68	79	70	62
	前年度対比		-5	2	9	-6	-18	19	-15	-11	11	-9	-8
	R4.3対比					-22	-46	-27	-42	-53	-42	-51	-59
小計	卒業生数	237	228	242	248	212	182	193	199	155	163	138	149
	前年度対比		-9	14	6	-8	-30	11	6	-44	8	-25	11
	R4.3対比					-28	-66	-55	-49	-93	-85	-110	-99
熊野市	卒業生数	132	113	117	119	109	96	101	104	104	123	98	98
	前年度対比		-19	4	2	9	-13	5	3	0	19	-25	0
	R4.3対比					-19	-23	-18	-15	-15	4	-21	-21
南牟婁郡	卒業生数	172	143	157	149	161	135	140	127	136	137	102	150
	前年度対比		-29	14	-8	12	-7	-19	5	9	1	-35	48
	R4.3対比					12	5	-14	-22	-13	-12	-47	1
小計	卒業生数	304	256	274	268	261	231	241	231	240	260	200	248
	前年度対比		-48	18	-6	-7	2	-32	-10	9	20	-60	48
	R4.3対比					-7	-5	-37	-37	-28	-8	-68	-20
東紀州合計	卒業生数	541	484	516	516	481	413	434	430	395	423	338	397
	前年度対比		-57	32	0	-35	-62	21	-4	-35	28	-85	59
	R4.3対比					-35	-103	-82	-86	-121	-93	-178	-119

《参考》

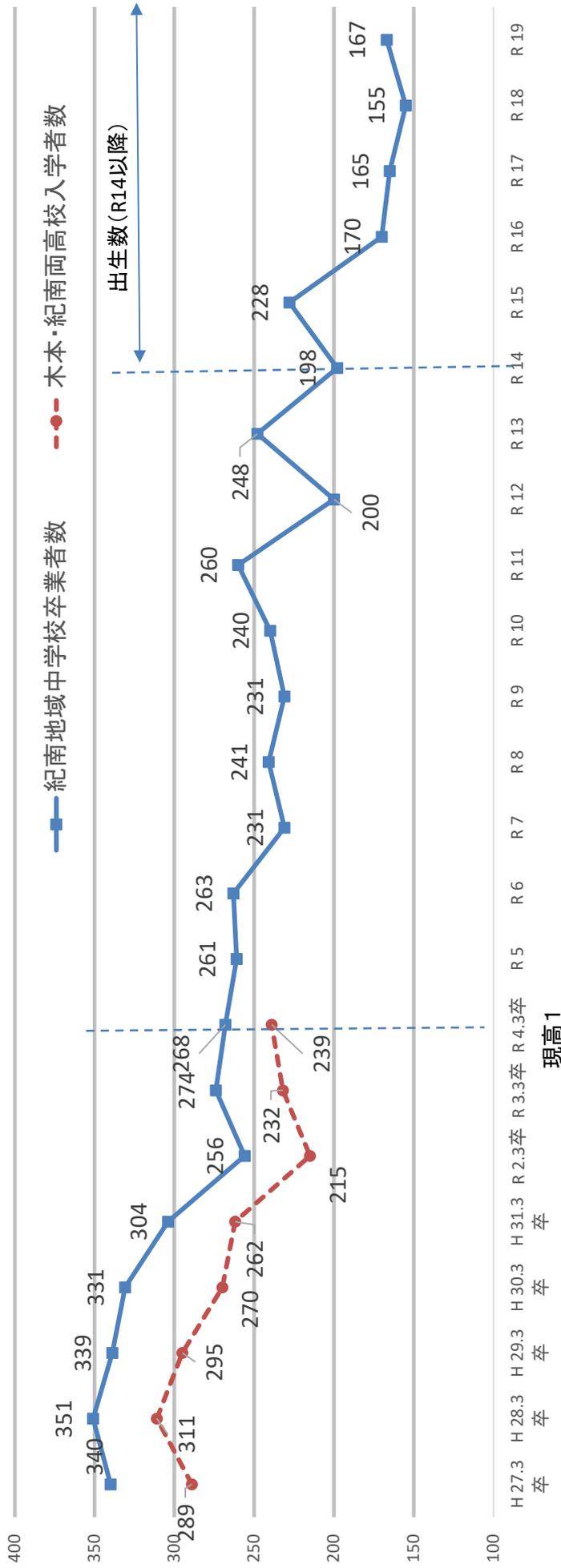
木本高校	募集定員	200	160	160	160	160
	欠員	0	2	0	1	-
紀南高校	募集定員	80	80	80	80	80
	欠員	18	23	8	0	-
学級数	木本・紀南	5・2	4・2	4・2	4・2	4・2

紀南地域の 入学定員の推移予測		R 5年度	R 6年度	R 7年度	R 8年度	R 9年度	R 10年度	R 11年度	R 12年度	R 13年度
	6学級	6学級	6学級程度	5学級程度	5学級程度	5学級程度	5学級程度	6学級程度	4学級程度	5学級程度

熊野市・南牟婁郡中学校卒業生数(予測)と木本・紀南両高等学校への入学者数

資料 3

※R14年度以降は地域の出生数を記載



熊野市・南牟婁郡の出生数

	H27年度出生 現小1	H28年度出生 5～6才	H29年度出生 4～5才	H30年度出生 3～4才	R元年度出生 2～3才	R2年度出生 1～2才	R3年度出生 0～1才
熊野市	99	73	108	60	87	82	68
御浜町	52	42	45	39	25	20	38
紀宝町	102	83	75	71	53	53	61
合計	253	198	228	170	165	155	167

1. 木本・紀南両高等学校への入学者人数は、熊野市・南牟婁郡中学校卒業生数と比較すると、地域外へ進学する生徒や就職する生徒等が一定存在することから、毎年40人～50人少ない状況です。この状況のまま推移すると、両校への入学者数は令和7年度には5学級規模、令和12年度には4学級規模となることが見込まれます。
2. 令和7年度に両校への入学者数が5学級規模となった場合、中学校卒業予定者の進路選択をふまえると、令和7年度以降の当地域における県立高等学校のあり方について協議を進め、方向性を示していく必要があります。

これまでの県立高校（全日制）の統合について

1 紀北地域の統合（尾鷲工業高校、長島高校）

平成 13 年 4 月 尾鷲工業高校が尾鷲高校と統合し、尾鷲高校にシステム工学科が設置される

平成 17 年 4 月 長島高校が尾鷲高校長島校となり、分校となる（普通科 1 学級）

平成 20 年 4 月 尾鷲高校長島校が募集停止となる（H22. 3 閉校）

	H11.3 卒	H12.3 卒	H13.3 卒	H14.3 卒	H15.3 卒	H16.3 卒	H17.3 卒	H18.3 卒	H19.3 卒	H20.3 卒
尾鷲地域総学級数	11	11	10	9	9	9	8	8	8	7
地域中学校卒業生数	542	510	492	496	481	441	411	400	381	350

（平成 12 年度募集定員）

尾鷲高校 7 学級 280 人
普通科（5）商業科（2）
尾鷲工業高校 2 学級 80 人
機械設備システム科（1）
電気情報システム科（1）

長島高校 2 学級 80 人
普通科（1）
福祉・情報コース（1）

（平成 13 年度募集定員）

尾鷲高校 8 学級 320 人
普通科（5）
商業科（2）
システム工学科（1）

長島高校 2 学級 80 人
普通科（1）
福祉・情報コース（1）

（平成 16 年度募集定員）

尾鷲高校 7 学級 280 人
普通科（3）
プログレッシブコース（1）
情報ビジネス科（2）
システム工学科（1）

長島高校 2 学級 80 人
普通科（1）
福祉・情報コース（1）

（平成 17 年度募集定員）

尾鷲高校 7 学級 280 人
普通科（3）
プログレッシブコース（1）
情報ビジネス科（2）
システム工学科（1）

尾鷲高校長島校 1 学級 40 人
普通科（1）

（平成 19 年度募集定員）

尾鷲高校 7 学級 280 人
普通科（3）
プログレッシブコース（1）
情報ビジネス科（2）
システム工学科（1）

尾鷲高校長島校 1 学級 40 人
普通科（1）

（平成 20 年度募集定員）

尾鷲高校 7 学級 280 人
普通科（3）
プログレッシブコース（1）
情報ビジネス科（2）
システム工学科（1）

【紀北地域（尾鷲市、紀北町）中学生の尾鷲高校、長島高校（分校）進学者の推移】

	H15.3卒	H16.3卒	H17.3卒	H18.3卒	H19.3卒	H20.3卒	H21.3卒
紀北地域中学校卒業生数	481	441	411	400	381	350	367
尾鷲高校進学者	279	280	279	261	237	223	254
長島高校（分校）進学者	73	32	23	17	26	×	×
地元高校進学割合	73.1%	70.7%	73.5%	69.5%	69.0%	63.7%	69.2%
募集定員 合計	360	360	320	320	320	280	280

	H22.3卒	H23.3卒	H24.3卒	H25.3卒	H26.3卒	H27.3卒	H28.3卒
紀北地域中学校卒業生数	371	360	355	328	309	340	289
尾鷲高校進学者の合計	260	263	268	240	246	234	187
地元高校進学割合	70.1%	73.1%	75.5%	73.1%	79.6%	68.8%	64.7%
募集定員	280	280	280	280	280	280	240

	H29.3卒	H30.3卒	H31.3卒	R2.3卒	R3.3卒	R4.3卒
紀北地域中学校卒業生数	279	281	237	228	242	248
尾鷲高校進学者の合計	208	180	145	151	160	152
地元高校進学割合	74.5%	64.1%	61.2%	66.2%	66.1%	61.3%
募集定員	240	240	200	200	175	175

○平成17年度紀北地域の中学校卒業生進路先

（紀北町：紀北中、赤羽中、潮南中、三船中 計183人）

- ・ 県内全日制県立高校 150人：（長島15、尾鷲92：58.5%）、（木本29：15.8%）、（松阪4、伊勢3、津3、相可2、松阪商1、宮川1：7.7%）
- ・ 県内全日制私立高校 16人：8.7%（三重13、他3） ・ その他17人：9.3%（近大高専8）

（尾鷲市：尾鷲中、九鬼中、輪内中 計217人）

- ・ 県内全日制県立高校 193人：（長島2、尾鷲169：79.5%）、（木本16：7.4%）、（松阪1、山商1、津西3、飯野1：2.8%）
- ・ 県内全日制私立高校 3人：1.4%（三重2、皇学館1） ・ その他21人：9.8%（近大高専7）

○令和3年度紀北地域の中学校卒業生進路先（現高校1年生）

（紀北町：紀北中、赤羽中、潮南中、三船中 計121人）

- ・ 県内全日制県立高校 94人：（尾鷲65：53.7%）、（木本8、紀南2：8.3%）、（相可7、昴学園2、松阪4、松阪商3、伊勢市内3：15.7%）
- ・ 県内全日制私立高校 19人：15.7%（三重14、皇学館3、他2） ・ その他8人：6.6%

（尾鷲市：尾鷲中、輪内中 計127人）

- ・ 県内全日制県立高校 109人：（尾鷲87：68.5%）、（木本11、紀南6：13.4%）、（松阪1、相可1、久居1、津商1、飯野1：3.9%）
- ・ 県内全日制私立高校 7人：5.5%（三重3、他4） ・ その他11人：8.7%（近大高専2）

※令和5年度募集定員（R5.3紀北地域中学校卒業見込み者数 220人）

- 尾鷲高校：160人 普通（70人）、プログレッシブコース（30人）
情報ビジネス（30人）、システム工学（30人）

2 伊賀地域の統合

(上野農業高校・上野工業高校・上野商業高校、名張西高校・名張桔梗丘高校)

平成 21 年 4 月 上野農業高校・上野工業高校・上野商業高校の 3 校を統合し、伊賀白鳳高校が開校する (旧上野工業高校敷地)

平成 28 年 4 月 名張西高校・名張桔梗丘高校を統合し、名張青峰高校が開校する (旧名張西高校敷地)

	H17.3 卒	H18.3 卒	H19.3 卒	H20.3 卒	H21.3 卒	H22.3 卒	H23.3 卒	H24.3 卒	H25.3 卒	H26.3 卒
伊賀地域総学級数	41	39	39	37	35	35	33	32	32	31
地域中学校卒業生数	1948	1854	1917	1794	1724	1742	1673	1643	1607	1627

	H27.3 卒	H28.3 卒	H29.3 卒	H30.3 卒	H31.3 卒	R2.3 卒
伊賀地域総学級数	29	31	29	29	28	27
地域中学校卒業生数	1496	1607	1530	1549	1503	1449

(平成 20 年度募集定員)

上野農業高校 2 学級 80 人
食農科学科 (1)
景観園芸科 (1)

上野工業高校 3 学級 120 人
機械科 (1)
住環境工学科 (1)
電子機械科 (1)

上野商業高校 4 学級 160 人
情報ビジネス科 (1)
健康生活科 (1)
福祉科 (1)
普通科 (1)

上野高校 普通科 (8)
あけぼの学園高校 総合学科 (2)

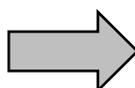
名張高校 総合学科 (5)
名張桔梗丘高校 普通科 (6)
名張西高校 普通科 (5)
英語科 (1) 情報科 (1)

(平成 21 年度募集定員)

伊賀白鳳高校
7 学級 280 人 (後期選抜くくり募集)
機械科 (機械工学)
電子機械科
(ロボット、電気工学)
工芸デザイン科
(インテリア、デザイン)
生物資源科
(バイオサイエンス、生産ビジネス)
フードシステム科
(フードサイエンス、パティシエ)
経営科 (ビジネス、マネジメント)
ヒューマンサービス科
(介護福祉、生活福祉)

上野高校 普通科 (7) 理数科 (1)
あけぼの学園高校 総合学科 (2)

名張高校 総合学科 (5)
名張桔梗丘高校 普通科 (6)
名張西高校 普通科 (5)
英語科 (1) 情報科 (1)

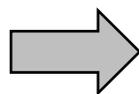


(平成 27 年度募集定員)

名張西高校 4 学級 160 人
普通科 (2)
情報科 (1) 英語科 (1)
名張桔梗丘高校 4 学級 160 人
普通科 (4)

(平成 28 年度募集定員)

名張青峰高校
8 学級 320 人
普通科 (7)
文理探究コース (1)



名張高校 総合学科 (5)

上野高校 普通科 (6) 理数科 (1)

伊賀白鳳高校 7 学級
機械科、電子機械科
工芸デザイン科、生物資源科
フードシステム科
経営科、ヒューマンサービス科
あけぼの学園高校 総合学科 (2)

名張高校 総合学科 (6)

上野高校 普通科 (7) 理数科 (1)

伊賀白鳳高校 7 学級
機械科、電子機械科
工芸デザイン科、生物資源科
フードシステム科
経営科、ヒューマンサービス科
あけぼの学園高校 総合学科 (2)

※令和 5 年度募集定員 (R5. 3 伊賀地域中学校卒業見込み者数 1,420 人)

○上野高校：240 人 普通科 5 学級、理数科 1 学級

○伊賀白鳳高校：240 人

機械科 (35 人)、電子機械科 (35 人)、建築デザイン科 (35 人)、生物資源科 (35 人)

フードシステム科 (35 人)、経営科 (30 人) ヒューマンサービス科 (35 人)

○あけぼの学園高校：80 人 総合学科 2 学級

○名張青峰高校：240 人 普通科 5 学級、文理探究コース 1 学級

○名張高校：200 人 総合学科 5 学級

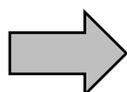
3 松阪地域の統合（宮川高校）

平成 22 年 4 月 宮川高校が相可高校と統合（相可高校敷地）

	H18.3卒	H19.3卒	H20.3卒	H21.3卒	H22.3卒	H23.3卒	H24.3卒	H25.3卒	H26.3卒	H27.3卒
松阪地域総学級数	31	31	31	31	30	30	30	30	30	29
地域中学校卒業生数	2080	2071	2093	2013	1962	1962	1977	2066	2025	1982

（平成 21 年度募集定員）

相可高校 6 学級 240 人
 普通科（3） 生産経済科（1）
 環境創造科（1） 食物調理科（1）
 宮川高校 2 学級 80 人
 普通科（2）



（平成 22 年度募集定員）

相可高校 7 学級 280 人
 普通科（4）
 生産経済科（1）
 環境創造科（1）
 食物調理科（1）

松阪高校 普通科（7）理数科（1）
 松阪工業高校 機械科等（6）
 松阪商業高校 情報ビジネス科（3）
 情報システム科（1）
 国際教養科（1）
 飯南高校 総合学科（2）
 昴学園高校 総合学科（2）

松阪高校 普通科（6）理数科（2）
 松阪工業高校 機械科等（6）
 松阪商業高校 情報ビジネス科（3）
 情報システム科（1）
 国際教養科（1）
 飯南高校 総合学科（2）
 昴学園高校 総合学科（2）

※令和 5 年度募集定員 （R5.3 松阪地域中学校卒業見込み者数 1,937 人）

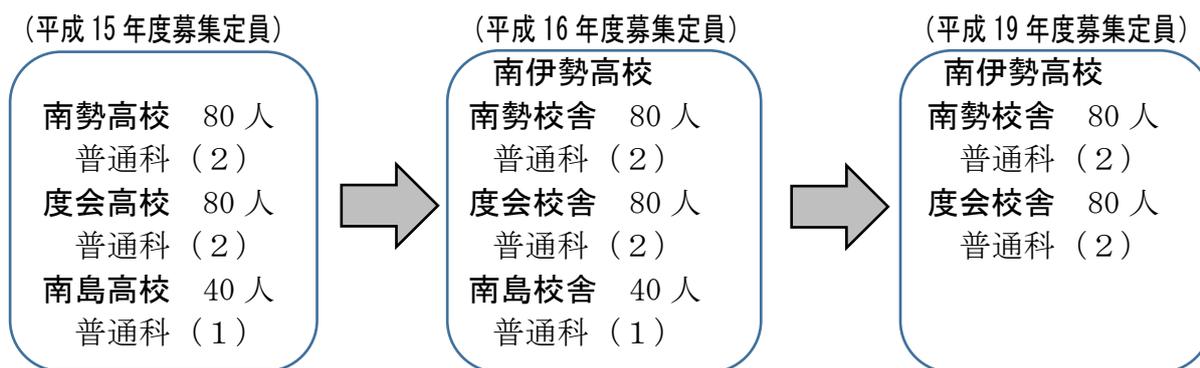
- 相可高校：200 人
 普通科 2 学級、生産経済科 1 学級、環境創造科 1 学級、食物調理科 1 学級
- 松阪高校：320 人 普通科 6 学級、理数科 2 学級
- 松阪工業高校：200 人 工業化学科 1 学級、機械科 1 学級、繊維デザイン科 1 学級、
 自動車科 1 学級、電気工学科 1 学級
- 松阪商業高校：160 人 総合ビジネス科 3 学級、国際ビジネス科 1 学級
- 飯南高校：80 人 総合学科 2 学級
- 昴学園高校：80 人 総合学科 2 学級

4 伊勢志摩地域の統合（南勢高校・度会高校・南島高校）

平成 16 年 4 月 南勢高校・度会高校・南島高校の 3 校を統合し、校舎制の南伊勢高校が開校する。

平成 19 年 4 月 南伊勢高校南島校舎が募集停止となる（H21.3 に閉校）。

	H11.3 卒	H12.3 卒	H13.3 卒	H14.3 卒	H15.3 卒	H16.3 卒	H17.3 卒	H18.3 卒	H19.3 卒	H20.3 卒
伊勢志摩地域総学級数	62	60	58	56	55	55	50	48	47	47
地域中学校卒業生数	3427	3351	3240	3130	3009	3105	2864	2777	2675	2695



【南島校舎の募集停止前と現在の南伊勢町中学生の進路状況の比較】

○平成 17 年度南伊勢町の中学校卒業生進路先（南勢中、南島中、南島西中 計 153 人）

県内全日制県立高校 110 人
 （南島校舎 10、南勢校舎 32:27.5%）、
 （明野 11、伊勢工 10、山高 9、山商 9、伊勢 6:29.4%）
 （鳥羽 2、志摩 2、昴学園 8、松阪工 5、松阪商 2、相可 2、他 2:15.0%）
 県内全日制私立高校 28 人:18.3%（皇学館 23、伊勢女子 4、三重 1）
 その他 15 人:9.8%

○令和 3 年度南伊勢町の中学校卒業生進路先（現高校 1 年生：南勢中、南島中 計 54 人）

県内全日制県立高校 39 人
 （南勢校舎 2:3.7%）、（伊勢工 6、伊勢 11、山商 6、明野 8、山高 4:64.8%）
 （水産 1、他 1:3.7%）
 県内全日制私立高校 12 人:22.2%（皇学館 5、伊勢学園 5、他 2）
 その他 3 人:5.6%

※令和 5 年度募集定員（R5.3 伊勢志摩地域中学校卒業見込み者数 1,928 人）

- 南伊勢高校：南勢校舎、度会校舎あわせて 2 学級（80 人定員:普通科）
- 宇治山田高校：200 人 普通科 5 学級
- 伊勢高校：280 人 普通科 6 学級、国際科学コース 1 学級
- 伊勢工業高校：160 人 機械科 2 学級、建築科 1 学級、電気科 1 学級
- 宇治山田商業高校：200 人 商業科 3 学級、情報処理科 1 学級、国際科 1 学級
- 明野高校：160 人 生産科学科、食品科学科、生活教養科、福祉科、各 1 学級
- 鳥羽高校：80 人 総合学科 2 学級
- 志摩高校：80 人 普通科 2 学級
- 水産高校：80 人 海洋・機関科 1 学級、水産資源科 1 学級

令和7年度に想定される5学級規模の高等学校の学びについて

紀南地域の高校がめざすべき教育や役割に係る当協議会での意見

(R2～4年度)

- 学びの選択肢が充実し、生徒が自ら学びたいと思える学校 (R2②、R3②、R4①)
- 生徒の進路実現に向け、大学進学に対応できる学校 (R3①、R3②)
- 様々な団体と連携する活動が充実している学校
 - 〔地域の産業や企業と連携した学び (R2①、R3②、R4①)
小中学校、大学等の地域の教育機関と連携した学び (R2②) 等〕
- 一人ひとりへの丁寧な指導により自己肯定感を高める学校 (R3①)
- ICTを活用して地域外ともつながる学習活動が充実している学校 (R3①、R3②)
- 学校行事や部活動が活発化している学校 (R2①、R2②)
- 多様な考えや価値観に触れながら、豊かな社会性、人間性を育む学校 (R3②)

想定 A 2校が統合して1つの校地で学ぶ（1校5学級規模）
【4学級から5学級へ1学級増となる際の状況変化を中心に記述】

○想定される学習活動

- ・教員数が増えることから、理科（物理、化学、生物、地学）や地理歴史（日本史、世界史、地理）、芸術（音楽、美術、書道）などについて、これまでより多くの科目で専門性の高い教員を配置できる可能性が高まる。
- ・多様な科目の講座開設が可能となるなど、難関大学から専門学校までの進学や就職などの生徒の幅広い進路希望に応える教育活動がより充実する。
- ・将来の進路に関わって同じ興味・関心や目標を持つ者同士が一定数集まって学び合うなどの教育活動が充実する。さらに ICT を活用して他校とつながることでより効果的な学習に発展することが期待できる（R4～ 他校の夏期課外をオンラインで受講）。
- ・総合学科で学級増を行えば、現在の1学級2系列を2～3学級4～6系列にすることが可能となり、生徒のニーズの高い看護・福祉系、芸術系だけでなく、紀南高校で培ってきた地域を学び場とした学習を系列として設けることもできる。こうした地域を学び場とした学習は生徒が1校に集まることから、より広域かつ多様なテーマで学習を進めていくことも可能となる。

○想定される学校行事や部活動

- ・生徒数が増えることから、文化祭では学級や部活動の発表数が増え、体育祭では種目数や競い合う機会が増えるなど、学校行事をこれまでより活性化させることができる。
- ・部活動については、生徒数が増えることにより、団体競技における大会への参加の可能性が広がることや、多様な部活動の設定がある程度可能となる。また、既存の部活動についても、部員数の増加が見込まれ、活動がより活発となる。

○想定される生徒の状況等

- ・生徒や教職員の人数が増え、生徒は学校生活全般を通じて多様な価値観に触れ、切磋琢磨しながら協働的に学ぶ機会が増すことから、社会性・人間性の育成が一層期待できる。
- ・紀南地域の中学校卒業者の8割を超える生徒が同じ高校で学ぶことから、地域全体の子どもたちのつながりの一層の広がりが期待できる。
- ・一方、地域の中学生在が1つの高校で学ぶことになるため、入試時や入学後も目的意識を持ちながら学習できるよう、5学級規模のうち総合学科を2～3学級にしたり、普通科にコースを設置したりすることで、校内に学びの選択肢を作るなどの工夫が必要である。
- ・今後も続く地域の中学校卒業者の増減に柔軟に対応することができる。

想定 B 2校が連携して2つの校地で学ぶ（4学級＋1学級）
【2学級から1学級となる際の状況変化を中心に記述】

○想定される学習活動

- ・1学級の学校では、生徒数・教員数は少なくなるものの、引き続き学び直し等の丁寧な指導や地域を学び場とした学習を行うことができる。
- ・教員配置は一般的に約8人となることから、単位数の小さい科目における常勤の教員の配置や生徒のニーズに応じた選択科目の開設は難しくなる。
- ・専門性の高い非常勤講師の確保が難しい当地域では、分校化して同じ学校の教員が学校間を行き来した授業や、ICTを活用した遠隔授業の実施など4学級規模の高校との連携や、地域を学び場とした学習等においてより地域と連携した活動を推進するなど様々な工夫が必要と考えられる。
- ・体育の授業は、1学級を男女別に分け、1講座の生徒数が20人を下回る状況が生じるため、ソフトボールやサッカーなどの集団競技において工夫が必要となる。

○想定される学校行事や部活動

- ・1学級の学校では、文化祭の部活動や学級の発表はこれまでと比べて半分となる。体育祭では生徒の活躍の機会が増える一方、同じ生徒同士が競い合う場面が多くなる。
- ・部活動では、部員数の減少に伴い、特に3年生の引退に伴って単独出場ができなくなることも多くなり、同じ状況の学校と合同チームを編成して大会に出場することが増える。
- ・現在のルールでは、単独出場ができない学校同士が合同チームを編成し大会に出場しているため、分校化することにより同一校として大会に出場することも考えられる。その際、週のうち何日かは、JRやバス等を利用していずれかの学校において練習することとなる。

○想定される生徒の状況等

- ・1学級規模ではクラス替えがなく、多様な価値観に触れる機会の減少や、人間関係の固定化が懸念されるため、学校行事、部活動だけでなく、日々の教育活動においても生徒が両校間を移動して共に学ぶ機会を設けるなどの工夫が必要となる。
- ・紀南地域は私立高校がなく公立高校のみで入学定員を設定しているため、2校をあわせると一定数の欠員が生じることとなる。欠員が1学級規模の学校に偏ると、定員の40人を大きく下回る入学者数となることも考えられ、入学者数が安定せず、生徒の学習環境が年度ごとに変化することが懸念される。

想定C 2校が独立して学ぶ（1校3学級+1校2学級）

【4学級から3学級へ1学級減となる際の状況変化を中心に記述】

○想定される学習活動

- ・3学級の学校では、教員数が減ることから、理科や地理歴史、芸術等において、それぞれの科目で専門性の高い教員を配置することが難しくなる。
- ・進学については、大学ごとに面接や小論文を含む受験科目が異なり、問題の難易度や傾向についても様々であるため生徒をグループに分けて指導しているが、教員数が減ることにより、その数を減らすなどして対応することとなる。
- ・選択科目の1講座あたりの受講希望者数も減ることから、学びのニーズに応じた多様な選択科目の開設がこれまでより難しくなる。
- ・地域の学びの選択肢を確保するために、総合学科の学級数を増やすことも考えられるが、普通科1学級・総合学科2学級となり、普通科が現在の3学級から1学級になることで、いくつかの科目では文理別の講座編成が難しくなる可能性がある。
- ・もう一方の2学級の普通科では、引き続き学び直し等の生徒一人ひとりへの丁寧な指導や、これまで取り組んできた地域を学び場とした学習を取り入れながら教育活動を行うこととなる。

○想定される学校行事や部活動など

- ・3学級の学校では、これまでより文化祭や体育祭の規模が縮小される。
- ・教員数と生徒数が減少することから、部活動顧問や活動する生徒の確保が難しくなり、これまで設置していた部活動の整理が必要となる。
- ・2校とも学級規模が小さいため、3年生が引退後の新チームにおいて学校単独での大会出場が難しくなる可能性が双方において高くなる。また、状況によっては合同での出場となるが、2校のうち一方のみが単独出場できる場合は、他方は遠方の学校との合同チームとなることも想定される。

○想定される生徒の状況等

- ・両校とも小規模校であるため、教員との関係や生徒同士の集団の中で多様な考え方に触れながら行われる協働的な学びの機会の確保のために、両校同士や両校とそれぞれの地域との連携がより必要となる。
- ・小規模校では開設科目や部活動数が限定されるため、大学進学に向けた学びや部活動に励みたい中学生は、地域外の高校へ進学していくことが懸念される。
- ・今後も続く学級増減への対応の方向性が明確になりにくく、さらに両校とも小規模校であるため、1学級の増減が生徒の学びに大きく影響することが懸念される。

紀南地域の設置学科と学級数の推移

参考資料1 R4第1回協議会資料

学校名	学科名	学級数																															
		49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	元	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17
木本	普通	7	6	7	7	7	7	7	6	5	6	6	6	6	6	6	6	6	6	7	4	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	2	2
	商業	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2												
	家政	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1													
	総合学科																																
紀南	計	10	9	10	10	10	10	10	9	8	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	8	8	8	8	8	8	8	8	7	7	7	
	普通	6	5	6	6	6	6	6	6	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	6	5	5	5	5	5	5	5	5	4	4	5	5	
	計	6	5	6	6	6	6	6	6	6	5	5	5	5	5	5	5	5	5	6	5	5	5	5	5	5	5	4	4	3	3	3	
合計		16	14	16	16	16	16	16	15	13	14	14	14	14	14	14	14	14	15	14	14	13	13	13	13	13	11	11	10	10	10		

【木本高校総合学科の系列の推移】

平成6年（5クラス）設置：初年度

- ①国際教養系 ②環境科学系 ③情報系 ④ビジネス系
- ⑤芸術・文化系 ⑥生活科学系 ⑦体育武道系

平成26年（2クラス）設置

- ①家庭系列 ②情報・会計系列
- ③スポーツ系列 ④スタンダード系列

令和2年度（1クラス）設置

- ①キャリア系列 ②スタンダード系列

学校名	学科名	学級数																			
		18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	2	3	3	3	4	
木本	普通	2	2	2	2	2	2	2	2	2	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	
	商業																				
	家政																				
	総合学科	5	4	4	4	4	4	4	3	2	2	2	2	2	2	1	1	1	1	1	
紀南	計	7	6	6	6	6	6	6	5	5	5	5	5	5	5	4	4	4	4	4	
	普通	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	2	2	2	2	2	2	
	計	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	2	2	2	2	2	2	
合計	10	9	9	9	9	9	9	8	8	8	8	8	8	7	6	6	6	6	6		

学級規模による教育環境の比較

1. 開設科目【普通科における科目の開設状況の例】

同じ普通科であっても各校の特色やコース設定があるため単純な比較はできないものの、学級規模が小さくなることにより、それぞれ開設科目が減少する傾向があります。

教科	科目	A校5学級	B校4学級	C校3学級	D校2学級	E校1学級
国語	現代の国語	○	○	○	○	○
	言語文化	○	○	○	○	○
	論理国語	○	○	○	○	○
	文学国語	○	○	○	○	○
	国語表現	○	○	○	○	○
	古典探究	○	○	○	○	○
	(学校設定科目等)	○	④	③	○	②
地理歴史	地理総合	○	○	○	○	○
	地理探究	○	○	○	○	○
	歴史総合	○	○	○	○	○
	日本史探究	○	○	○	○	○
	世界史探究	○	○	○	○	○
	(学校設定科目等)	○	○	○	○	○
	公民	公共	○	○	○	○
政治・経済		○	○	○	○	○
(学校設定科目等)		○	○	○	○	○
数学	数学Ⅰ	○	○	○	○	○
	数学Ⅱ	○	○	○	○	○
	数学Ⅲ	○	○	○	○	○
	数学A	○	○	○	○	○
	数学B	○	○	○	○	○
	数学C	○	○	○	○	○
	(学校設定科目)	⑤	③	③	②	○
理科	科学と人間生活	○	○	○	○	○
	物理基礎	○	○	○	○	○
	化学基礎	○	○	○	○	○
	生物基礎	○	○	○	○	○
	地学基礎	○	○	○	○	○
	物理	○	○	○	○	○
	化学	○	○	○	○	○
	生物	○	○	○	○	○
(学校設定科目等)	○	○	○	○	②	
保健体育	体育	○	○	○	○	○
	保健	○	○	○	○	○
	(学校設定科目等)	○	○	○	○	○
芸術	音楽Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ	○	○	○	○	○Ⅰのみ
	美術Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ	○	○	○	○	○Ⅰのみ
	書道Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ	○	○Ⅲなし	○	○	○
	(学校設定科目)	○	⑥	○	②	②
外国語	英語コミュニケーションⅠ	○	○	○	○	○
	英語コミュニケーションⅡ	○	○	○	○	○
	論理・表現Ⅰ	○	○	○	○	○
	(学校設定科目等)	④	⑤	○	○	③
家庭	家庭基礎 または 家庭総合	○	○	②	○	○
	フードデザイン	○	○	○	○	○
	(学校設定科目等)	○	○	○	○	③
情報	情報Ⅰ	○	○	○	○	○
	情報Ⅱ	○	○	○	○	○
	その他	○	○	○	○	○
商業	簿記	○	○	○	○	○
	情報処理	○	○	○	○	○
	(学校設定科目等)	○	○	○	②	③
(学校設定科目等)	○	②	○	②	②	

○の中の数字は設置された科目数。○のみは1科目

2. 教員配置

各校に配置する教員数は、学級数（≒募集定員）に応じて定められており、

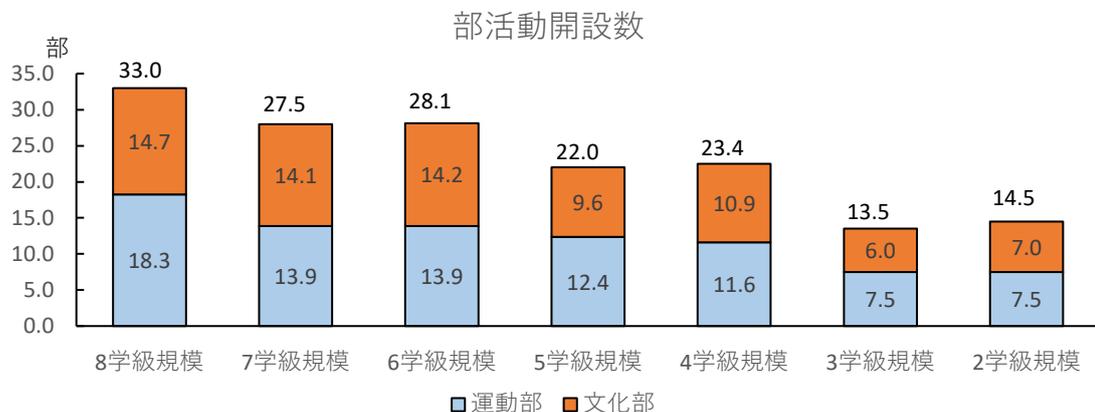
1学級減るごとに5～7人の教員が減ります。

学級数	8学級	7学級	6学級	5学級	4学級	3学級	2学級	1学級
教員数 (人)	52	47	42	35	28	22	15	8

※ 上記以外に一定の加配教員、非常勤講師の配置あり

3. 部活動

部活動開設数については、4～8学級規模の学校では平均22～33部が開設されている一方で、2～3学級規模の学校では平均13.5～14.5部と、6学級規模以上の学校の半分程度になっているなど、学校規模が小さくなるほど生徒における部活動の選択の幅は限られる状況となっています。また、硬式野球、サッカー、バレーボール、バスケットボールなどの団体競技に所属する生徒数が少なくなり、単独チームでの大会出場が難しくなっています。



※ 令和2年度三重県学校体育・部活動実態調査より

【木本高校】

	募集定員	全学級数	全校生徒数	運動部数	運動部員数	文化部数	文化部員数
令和4年度	4学級	12組	472人	12部	220人	5部	140人
令和3年度	4学級	13組	515人	12部	243人	6部	169人
令和2年度	4学級	14組	545人	13部	226人	7部	168人
令和元年度	5学級	15組	580人	15部	264人	10部	199人
平成24年度	6学級	18組	674人	18部	306人	14部	220人
平成18年度	7学級	21組	834人	19部	319人	16部	241人

【紀南高校】

	募集定員	全学級数	全校生徒数	運動部数	運動部員数	文化部数	文化部員数
令和4年度	2学級	7組	196人	7部	51人	9部	48人
令和3年度	2学級	6組	176人	7部	51人	9部	36人
令和2年度	2学級	7組	193人	8部	58人	10部	52人
令和元年度	2学級	8組	236人	9部	79人	10部	80人
平成24年度	3学級	9組	326人	8部	115人	10部	59人
平成18年度	3学級	9組	287人	8部	85人	10部	59人